

作・立直

自殺することを推奨される青年ロボットが、
一人の家出少女と出会い、生きる喜びを見出
した上で自殺を決意する

「ロボット・アウエイ」

「ロボット・アウエイ」登場人物

年会費6212
役者を探すヒミツ
日安。
ロボットティア77-2v
ニヤニヤティア
ニヤニヤティア
前嶋の父。

ノキオ : ロボットの青年
麻里 : ノキオの出会った少女
前嶋(80)(17) : 麻里の父

演説者

ロボット管理委員 1

ロボット管理委員 2

○ 性风俗店、性风俗店街、両

N 「(ロボット管理委員1の声で)君たち旧型のロボットには、自分から、アウエイになつてほしい」

○ 性風俗店の事務所・夜

セイフティモード | 文字下げ
ルート記録

ト書き文字下げ
ルート記録

性風俗店の呼び込みの法被を来たロボットの青年・ノキオと、ロボット管理委員会の二人が、机を挟んで向かい合つている。委員の二人はノキオに対して尊大な様子である。

ノキオは銀色で、箱ばつており、いかにもロボットらしい見た目である。

委員1 「もちろんこれは強制ではない。君たちにもロボット人権があるだろう」

委員2 「この近辺で働く、旧型の——二一〇〇年以前製造のロボット全員に呼びかけていいんだ。なんだ、その、ゼロニウムの数も限られていて、回さなくちゃいけないんだ……分かるかい？」

ノキオ「はい。私はあなたの発言を理解しています。ゼロニウムは人工知能のICチップに必要不可欠なレアメタルです。その量は非常に限られ、ほとんど枯渇しています。そのため、新しいロボットを作るには、旧型のロボットをスクラップにし、そのゼロニウムを取り出すしかありません」

委員1 「スクランプ、じゃない。アウエイだ」

ノキオ「申し訳ありません。私は旧型です。言葉遣いのガイドラインの変化に遅れています」

委員2 「なに、最近ではゼロニウムの技術も発達していくな。君くらい古い型だと、およそ数百体分のロボットが作れるんだよ。そうすれば、公共の福祉のためにもなる」

ノキオ「私は望みません」

委員1 「……は？」

ノキオ「私は、公共の福祉の~~ために~~尽くした」と考えておりません」

委員2「一人、苦々しい顔を見せる。

会話中に「キオの台詞は
とても良いです。
内面はストーリーテリングです。

① ヘーッ! 数必須!!
どうやら書きこねるぞ!
かんたん! オレが一回でも地面に落として
未洗濯アラドゼ!

1. たまに、2. か風景が
欲しいところ。黒板にNよりも
効果的かと。
2. あれえ? ゲームセンターの
メーンにしちゃった。押井守
1300円と。

○性風俗の店の外・夜

雨が降っている。ノキオは傘もささずに、躊躇なく店の外に出て雨に打たれる。体にガタが来ているようなひよこひよこした足取りで歩く。

ふと路地裏に、十代後半の少女がいることに気づく。肩から大人びたポーチを掛けている。

この空気(?)
↓

ノキオ「もしもし」

ノキオはしゃがみ、少女の顔をのぞき

込む。

ノキオ「あなたは、雨の中にいると風邪をひきます」

麻里「ん……」

ノキオ「あなたがこんな場所で寝ていると、いろんな男たちが貴方に悪戯をしようとしています。するとその男たちは得をします。私はそれを望みません。起き上がってください」

麻里「帰る場所ないの……」

ノキオ「私はそんなことを聞いていません。起き上がりつてください」

ノキオ、麻里の額に手を当てる。ノキ

オは顔をしかめる。

○ノキオのアパート・深夜

四畳半しかないノキオのアパート。しかし、部屋の隅の本棚に「ロボット差別の実態」「新しい種・ロボット」「人類不要説」などの背表紙が並んでいる。

ノキオはコンビニで買ってきたカップの卵スープとコーヒー牛乳を飲んでいる。ノキオは突つ立つて、コンセントから充電している。

麻里は、カップスープから口を離す。

麻里「ありがとうございます、ロボット君」

ノキオ「私はノキオと言います。ロボット君とは言いません」

彼の思想はこのは
(今にも生かすてりまう)
カットいい。
どうかに泊まねやと思ふ。
金はもてないか?
どうかに泊まねやと思ふ。
ありかどり。りんごのえす
とノキオが重なった
ことにすると一見で
涙腺がちる。

彼女がいじらばれてる
(手下で寝取られ...)
腰を抱えて濡れてしまう
(腰を抱かされると...)
肌が冷めますと...
肌が冷めますと...
肌が冷めますと...
肌が冷めますと...

麻里 「ノキオ？ 人間みたいな名前してますね」

ノキオ 「あなたは、生意気だと感じているのですか？」

麻里 「別に。私は麻里って言うの。よろしくね。……ところで、ここ、狭くない？」

ノキオ 「ロボットの生活には、不要なスペースはありません」

麻里 「へえ……そういうものなんだ」

ノキオ 「あなたは珍しいと考えているのですか？」

麻里 「そうよ」

ノキオ 「私は、あなたは世間知らずだと思します。旧型ロボットの日常に触れないで済むなんて、さぞかし、良い育ちなのでしょう」

麻里 「嫌味なロボットねえ……」

感心したように呟く麻里。ノキオ、目線を逸らす。

麻里 「あなたは人間が嫌いなの？」

ノキオ 「はい。私は人間が嫌いです。私は人間を敵だと思ってます」

麻里 「へえ。私も人間が嫌い。だからパパのどこから逃げてきたの」

ノキオ、口をつぐむ。

麻里 「あなた、人間が嫌いだったら、私を匿つてくれない？」

ノキオ 「嫌です。私は人間はみんな敵だと思っています」

麻里 「じゃあ、なんで私を助けたの？」

ノキオは顔をしかめる。

「ノキオの感情が分らない」

「ラストの夕飯に付ける」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

E × D × C × B × A

のよしにきよん下すい。

モニターシューティングス

といふやうです。まのまにか
えでます。

○ノキオと麻里の日常

ノキオ 「あなたは人間が嫌いなの？」

ノキオ 「はい。私は人間が嫌いです。私は人間を敵だと思ってます」

ノキオ 「へえ。私も人間が嫌い。だからパパのどこから逃げてきたの」

ノキオ、口をつぐむ。

麻里 「あなた、人間が嫌いだったら、私を匿つてくれない？」

ノキオ 「嫌です。私は人間はみんな敵だと思っています」

麻里 「じゃあ、なんで私を助けたの？」

ノキオは顔をしかめる。

「ノキオの感情が分らない」

「ラストの夕飯に付ける」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

「おとことなく、子供と子供」

3

7 十分には手つかずといつが
死の理由とすれば、それは不器用な
ノキオの言葉がまたがった。

店から帰つてくる。麻里は喜ぶ。

麻里、ノキオに絵本『百万回生きたねこ』をプレゼントする。

麻里がうたた寝したので、ノキオが毛布をかけてやる。

ある日、ノキオは自分のアパートの扉に、「社会の害悪、ロボットよスクラップにしてやる」という張り紙が貼られていることに気づく。

× × ×

○性風俗店街

ノキオ、やはりガタが来ているような風俗店街を歩く。ふと、壯年の男が演説していることに気づく。演説者の周りには、多数の人間と少数の新しい型のロボットたち（ノキオよりもシャープな見た目）が集っている。演説者「ゼロメタルは現在、非常に枯渇しております。これから技術革新のために、あたらしい未来のために、皆さまの献身が必要です。どうか、二〇〇〇年以前に製造されたロボットの皆さま、お願いです。自主的アウェイによつて、皆さまの体内にあるゼロニウムを、未来のロボットたちのためにご提供ください。あなたの命が、みんなのためにあります！」

人間と新型ロボットたちは拍手をする。

ノキオ、早足でその場を去る。

N 「（ノキオの声で）麻里、もし、自分の命と引き換えに、赤の他人の、誰かの命が生まれることができれば、あなたはどうしますか？」
N 「（麻里の声で）え？ うーん。どうだろう。ノキオは助けたりするの？」
N 「（ノキオの声で）私はそれをしません。そんなことをしたら、沢山の人間が喜ぶ。人間は……いえ、新型のロボットも、誰も彼もみんな敵です。私は、敵の幸せのために、自分を犠牲にするなんて愚かなことはしません」

僕は、彼女に恋しかった
が、彼女は助けて
良いと思う。
だからこそこの恋を、
もうと上手に運べよう。
彼の福音の理由は
明示されない。彼は
明かしてみつけられ
なくなっている。

少女マニアに軽かれて
たどろくシザーハンズと
見えない。変形の者と
人の力が、まだ。

どうしてノキオは
日々に力を取るのか?
それがここにあります。
それが山は、なぜか
よく見る三つも実力も
ないでしょ?

アラカルトが、即席に
よく見る三つも実力も
ないでしょ?

二ついい金をなせりつけ

対面い子アムと
やるベヨ。

目そめ。セヌことかう
逃げてよ。

N 「（麻里の声で） 敵……敵なの？ じゃあ、
私も、敵？」

○ノキオの自宅

アパートにたどり着くと、自分の部屋のドアがほとんど破壊されていることに気づく。ドアには「ロボット死すべし」という貼り紙があった。
中に入れる？ ノキオはまさか、という表情になり、急いで家に向かう。そこには麻里が倒れていた。ぼろぼろの状態になっている。ノキオは彼女の傍で片膝をつき、のぞき込む。



ノキオ「麻里！」

麻里「ノキオ……痛いよ……」

ノキオ「麻里。私は、あなたをどこに運べばいいですか？」

麻里「病院……」

ノキオ「私は、それは違うと思う。麻里、あなたのお父さんの場所を教えてください」

麻里「え……？ 私のポーチの、お財布中に、パパの会社の名刺があつたと思う：」

ノキオ、麻里のポーチの財布をのぞき込み、名刺を取り出す。「工学博士 前嶋修」という文字が印刷されている。

麻里「ノキオ、助けて……」

ノキオ「大丈夫、私は今すぐ、あなたを助ける」

麻里「ありがとう……」

ノキオ「麻里、私は、あなたがロボットだということを初めて知りました」

麻里の片足が折れていって、そこからロボットらしいコードやプリント基板が見えている。
×カレジょ。プリント基板、もしにメモリつくでんかよ！

麻里「え？ うそ、私は人間よ……」

ロボット研究所のようなところ。麻里は台の上に寝かされ、沢山のロボットアームによつて修理がなされている。八十年代の男・前嶋とノキオが、二人並んで椅子に座りながらそれを見守る。ノキオの片手には「百万回生きた猫」の絵本。

前嶋 「私の娘、すごいだろ？ 人間にしか見えないロボットだ。見た目だけじゃない。会話も、思考も。自分を人間だと思い込むほどに人間に近いロボットなんだ」

ノキオ 「博士はどうして、彼女を作つたのですか？」

前嶋 「昔……あの子の前に、もう一人、ロボットを作つたんだ。でもそのころは人工皮膚もまだできておらず、どう見てもロボットの外見だった。だから、反ロボット団体の人たちに、殺されたんだ……」

前嶋が、ふつと机の上の写真に視線をやる。そこには少しだけ若い前嶋と、ノキオと同じ型のロボット少女がいた。

前嶋 「今回、彼女を殺したのも、同じ団体の人間だろう。彼女がロボットだと嗅ぎ付けてたんだ」

ノキオ 「……この世界は、残酷ですね」

前嶋 「そうだよ。……でも、麻里が生まれたのは、この世界なんだ。私が愛するものも、私が憎むものも、すべては、陸続きなんだ」

前嶋、背中を丸める。

前嶋 「だから私は、人間と変わらないロボットがいるべきだと思ったんだ。いまだに対立する二者の架け橋になるようなロボットが。そうすれば、人間だのロボットだの差異なんて些細なことだとみんな気づく。ロボットが本当に人間の友となる世界に、ぐつと近づけるはずだ……」

麻里の治療をしているシステムから、警告音がなる。

前嶋 「ロボットだつて……人間と同じなんだ。神様……私の命なんていらない。だから、

前嶋 (80)
王代紀二郎
六四 鳴保守 (80) みどり
はり鳥くすゑるに。
はり鳥くすゑるに。
はり鳥くすゑるに。

あの子を助けてくれ……麻里…………

麻里の治療をしていたロボットアーム
や作業台が、徐々に作業をやめる。メインモニターに、「Away」の文字が浮かぶ。

前嶋博士、大声で泣き崩れる。ノキオは「百万回生きた猫」の絵本に目線を落とす。

死ぬ？
死んでしまう？
死んでいいよか？

○ロボット管理委員会の建物の外

ノキオ、穏やかな表情で、ロボット管理委員会の建物を見上げる。

彼の手には書類があり、そこには「自主的アウエイ申請書類」と書かれている。
ノキオ、ロボット管理委員会の建物の中へと向かっていく。

○T 「ロボット・アウエイ」（小さい文字で）

了

ノキオ「私は生まれ戻るのですか？」

A「そうだ。沢山のロボット達の材料になり、

人間たちの幸福に尽くすんだ」

ノキオ「私はそれをお聞きません」

B「人間たちの幸福との限界ない。ロボットと

人間の架け橋の役割も生まれた。全員が

幸福になれるのがくる」

ノキオ「私はこれからお聞きます」

トリニティ「ストなら、オキナが走る」

トミコ「とくと、それと逆算でてくるのだ」

トミコ「麻里には彼氏のボットかいながゼロから走りないと
分ると、

麻里には彼氏のボットかいながゼロから走りないと
死ねば假想の理にならなか

「く、く、くとも生きてと四年の放題をとふくらむがせよ。